

私の戦争体験

坂口 志津

中央二丁目

「志津……起きなさい。早く早く」

「うーんもう死んでもいい、寝ていたい」

「なにいつてんの」母のどなるような声。

ああ、また鳴っている、不気味な空襲警報発令のサイレン……

毎晩毎晩衣服を付けたまま床につく生活、見上げれば探照灯

(サーチライト)が敵機を探し夜空に灯りの交差、それを追う

高射砲弾の炸裂の音。

兄たちが出征した私の家では母娘の二人きり、防空壕を掘る

力もないので、庭に角型の風呂を横に置き、上に土を載せた粗

末なものだった。

空襲警報解除の報が出るまで、その風呂の中で、母と私は大

豆の炒った保存食の缶を大事に抱えて、ただ、ただ、今日の無

事を祈る。

その頃女学校四年の私は、世田谷用賀の陸軍衛生材料廠に学

徒動員の一人として毎日通っていた。防空頭巾に、ゲートルを

巻いて。そこではモルヒネ注射液の箱詰め作業をした。その時

友達と口ずさんだ唄が、高峰三枝子の湖畔の宿だった。

やがて東京から埼玉の親類宅に疎開することになった。

その頃、福岡陸軍軍需品支廠の主計官であった兄が出張で上

京して来た。私は兄と一緒に福岡に行くことを希望した。

軍服の兄に、お下げ髪、緋かすのもんぺに、リュック一つの妹の

私は嬉々として東京を発っていった。その時母は、これが別れ

になるのではと思ったそうだ。

軍用列車は満員、出入は窓からだった。

神戸駅は空爆を受けた後で、駅舎と線路の枕木が赤い炎を見

せていた。

空爆をのがれるために、福岡市内から郊外の山間の小学校、

さらに山の中へと移動した。私たちの生活の中には、敵機の機

銃掃射をのがれるために、テントの上のネットに、木々の枝葉

を載せて擬装するのも仕事だった。

竹槍の訓練、野ざらしで、水分をたっぷり含んだ角材の運搬

によろける私を、おさげをつかんで「しっかりやれ」と、どな

る下士官、何の情報もわからぬ山の中の生活だった。

擬装生活の中にも機銃掃射での死者もでた。

やがて広島から、

「ピカドン（原子爆弾のこと）

ペロリ（皮膚がペロンとむける状態）

四里、四方（広範囲に渡るの意味）」

というすごいものが落ちたという報が入り、大変なことだと思
った。福岡に転任する前に、広島に勤務していた兄は後日、下
宿先の娘さんの死報を知った。私たちが下宿していた家の娘さ
んが、久留米の空爆で、ボロボロのもんぺに包帯姿で、村人の
リヤカーに乗って帰って来たが、今もおさげ髪に鉢巻姿で痛さ
をこらえていた女学生の彼女の様子が忘れられない。

まもなく長崎にも原爆投下……。

やがて信じられない敗戦の報……。どうしたらいいのか……。

上官の大尉が私達を集めて、

「米軍による女子の辱めがあるやもしれぬが覚悟するように
……」

その意味も解せない十八歳になったばかりの私だった。

